

22 明治9年11月26日 菊池長閑

第十一号十一月廿六日於鍬カ崎村記之

博覧会後綴も相達御影にて御かゝ様も御慰御慶ひ候扱て羨敷事  
ニ候扱亨義本月一日頃より風邪ニ而入籠居候得共格別之事も無  
之引入なからも日々御用承り薬用も処之病院之医師相頼居候趣  
昨年も今時分煩候同症之軽き様子ニ而座右之事も手自取計居候  
程之様子唯夜分如何とも安眠ならず是のミ本人も懸念安眠之手

当申談十五日夜八時ニ散葉一帖服候処快眠の様子ニ而側よりも薬物有之と思しき程之処其夜午前三時頃ニ至模様不宜夫より取騒医師相招候得共不叶十六日午前六時十分ニ終ニ病死之由飛脚十七日夕盛岡ニ達実ニ驚天言語ニ絶候次第察可給右ニ付取仕舞并家族盛岡へ引越等之気配等いたし翌十八日午後一時出宅取急候得共其日終日雨翌十九日雪閉伊川筋ニても夜通し六ヶ敷□り上相後漸々廿一日ニ歟ケ崎へ着家内之愁傷是又毫も難述然るニ我等之着を待居候得共延引ニ付十九日ニ処之者共之厚世話ニ而葬送相濟歟ケ崎一番扱処之後金浜山と申処へ葬候段々様子を承るニ睡眠之手当アヘンを用候趣誰云ふとなく多量ニ用候故斯る大事ニ至候と当処大評判ニ相成居候趣然れとも是ハ道詠之浮説ニ而取ニ不足事ながら千万左様之事ニ而は実ニ残念申計無之次第且又医者ハ我等之着前ハ死後も折々参候趣我等之着後は一切不参是又不審之一廉彼是思合すれハ何共其手当不審ニ候乍去確証有之義ニも無故家内之者々口外ハ急度差留置候弥以アヘン之子細なるものにてハ残念申計り無之次第ニ候祠官已来宮古にのミ居互ニ懸隔居候へとも文通にて諸相談もいたし又折ニハ出県も有之故貴様留守ニ付而も力に致居候処逆に斯先立られ片腕を脱する心地ニ候斯相成ニ候得は弥増貴様之帰朝をのミ祈居候察可給候御かゝ様も御愁傷候得共至極御立派にて早々出立世話いたし候様御差函にて出立罷越候其後便も有之御無事之趣ニ候是ハ安心可申候○宅命へ不取敢電報いたし必横濱在艦と心得候処不在之趣十八日午前八時ニ返事来遺憾と存候処横須賀に於て廿二日に承知いたし下ると之返事昨夕方歟ケ崎へ郵便を以申来

一同大慶致居候宅命到着迄ハ我等滞留已後之処万事相談相究可申宅命之存意如何可有之先我等之考ニハ当地寄留も只今にてハ六ヶ敷五十日も済候ハ盛岡へ為引越候方と考居候返くも不幸此事ニ候先は右報知而已申入候折角相凌可申候以上

武夫殿

長閑

尚本宿家族無異ニ候是また休神相有之候

(封筒裏)

「グード、モーニング

(武夫注記)

菊池 武夫 殿

要用報平安

(封筒裏)

「日本陸中国盛岡岩手県下

第一大区五小区加賀野村

八十六番地

菊池 長閑

十一月廿六日浦歟ケ崎ヨリ発」

(武夫注記)

「返事済」